

江戸開府以降の歴代川越藩主について

～現在と過去との対話、八家二十一人の川越藩主たちと(大略)～



令和7年9月20日 松尾鉄城 (高18回) 女子栄養大学客員教授
川越市文化財保護審議会副会長
ふじみ野市文化財類審議会会長

天正18年(1590)以後、江戸時代、川越藩主一覧

酒井河内守重忠 (しげただ)		天文18年(1549)～元和3年(1617)7月21日	
家康	天正18年(1590)8月1万石～慶長6年(1601)3月	前城地三州西尾	川越城主11年間 上州厩橋移封3万3千石

老中 酒井備後守忠利 (ただとし)		永禄2年(1559年)～寛永4年(1627)11月14日	
家康	慶長14年(1609)9月2万石(1609)9月～寛永4年(1627)	前城主の弟 前城地駿州田中3万7千石	川越城主18年間
秀忠・家光			
大老 酒井讃岐守忠勝 (ただかつ)		天正15年(1587)6月16日～寛文2年(1662)7月12日	
秀忠	寛永4年(1627)5万石～寛永11年(1634)	前城主の子 前城地武州深谷	川越城主7年間 若州小浜移封10万石
家光			

城代 相馬虎之助		寛永11年(1634)	
老中 堀田加賀守正盛 (まさもり)		慶長13年(1609)12月11日～慶安4年(1651)4月20日	
家光	寛永12年(1635)3月3万5千石～寛永15年(1638)3月8日		川越城主3年間 信州松本に移封10万石

城番 水谷伊勢二郎		寛永15年(1638)	
老中 松平伊豆守信綱 (のぶつな)		慶長元年(1596)10月30日～寛文2年(1662)3月16日	
家光	寛永16年(1639)1月6万石～寛文2年(1662)	前城地武州忍	川越城主23年間
家綱			
松平甲斐守輝綱 (てるつな)		元和6年(1620)8月5日～寛文11年(1671)12月12日	
家綱	寛文2年(1662)～寛文11年(1671) 遺領 7万5千石		川越城主 9年間
家綱 松平伊豆守信輝 (のぶてる)		万治3年(1660)4月8日～享保10年(1725)6月18日	
網吉	寛文11年(1671)～元禄7年(1694) 遺領 川越城主23年間 下総古河に 7万5千石		3代55年間



大老 松平美濃守吉保(よしやす) 柳沢出羽守保明(やすあきら)始めの称) 万治元年(1659)12月18日~正徳4年(1714)11月2日
 網吉 元禄7年(1694)年~宝永元年(1704) 1代 **川越城主10年間** 甲斐甲府藩主15万1200石

老中 秋元但馬守喬知(たかとも) 慶安2年(1649)~正徳4年(1714)8月14日
 網吉 宝永元年(1704)~正徳4年(1714) 前城地甲州谷村 5万石後6万石

川越城主10年間

秋元喬知肖像(光厳寺所蔵)



家宣 秋元伊賀守喬房(たかふさ) 天和3年(1683)~元文3年(1738)9月5日
 家継 正徳4年(1714)~元文3年(1738) 遺領

川越城主24年間

吉宗 秋元但馬守喬求(たかもと) 享保元年(1716)~延享元年(1744)2月26日
 吉宗 元文3年(1738)~寛保2年(1742) 遺領

川越城主 4年間

秋元喬求肖像()



老中 秋元摂津守凉朝(すけとも) 享保2年(1717)~安永4年(1775)5月25日
 吉宗 寛保2年(1742)~明和4年(1767) 遺領 出羽山形に移封
 家重

川越城主25年間 4代 **63年間**

家治 松平大和守朝矩(ともりの) 元文3年(1738)3月14日~明和5年(1768)6月10日
 明和4年(1767)~明和5年(1768) 前城地前橋 15万石後17万石

川越城主1年間

松平朝矩像(孝顕寺蔵)



家治 松平大和守直恒(なおつね) 宝暦12年(1762)5月1日~文化7年(1810)1月18日
 家斉 明和5年(1768)~文化7年(1810) 遺領

川越城主42年間

松平直恒像(孝顕寺蔵)



家斉 松平大和守直温(なおのぶ) 寛政7年(1795)2月14日~文化13年(1816)7月28日
 文化7年(1810)~文化13年(1816) 遺領

川越城主 6年間

松平直温像(孝顕寺蔵)



家斉 松平大和守斉典(なりつね) 寛政9年(1797)11月2日~嘉永3年(1850)1月20日
 家慶 文化13年(1816)~嘉永3年(1850) 遺領(加増2万石**併せて17万石**)

川越城主34年間
 松平斉典像(孝顕寺蔵)



家慶 松平大和守典則(つねのり) 天保7年(1836)1月23日~明治16年(1883)
 家定 嘉永3年(1850)~嘉永7年(1854) 遺領

川越城主 4年間

家定 松平大和守直保(なおよし) 天保10年(1839)1月9日~文久元年(1862)12月10日
 家茂 嘉永7年(1854)~文久元年(1861) 遺領

川越城主 7年間

政事 松平大和守直克(なおかつ) 天保11年(1840)2月26日~明治30年(1897)1月25日
 家茂 文久元年(1861)~慶応2年(1866) 遺領 上州前橋所替

川越城主 5年間

川越藩の石高17万石はそのまま居城を前橋城に移転 松平直克肖像写真

7代 **99年間**



老中 松平周防守康英(やすひで) 文政13年(1830)5月26日~明治37年(1904)7月5日
 家茂 慶応2年(1866) 8万4百石~明治2年(1869) 前城地奥州棚倉

川越城主3年間

慶喜 松平周防守康載(やすとし) 嘉永7年(1854)10月11日~大正12年(1923)9月30日
 慶喜 明治2年(1869)4月~明治4年(1871)7月10日(廃藩)

川越城主 2年間

2代 **5年間**

徳川家康の幕下で唯一11年間川越城主を務めた「酒井重忠」の略歴

天正18年(1590)41歳～慶長6年(1601)53歳 まで川越城主

酒井重忠の生没 天文18年(1549)～元和3年(1617)7月21

[徳川家康生没 天文11年(1543)12月26日～元和2年(1616)4月17日]

弟 酒井忠利の生没

永禄2年(1559)～寛永4年(1627)11月14日

徳川氏の譜代家臣・酒井正親(松平清康・広忠・徳川家康の3代に仕える。姫路藩主の祖。姫路神社の祭神)の次男。若い頃から徳川家康に仕える。家康初期の**主要な合戦の大半に参加して武功**を挙げた。

20歳 ①永禄12年(1569)の遠江掛川城攻め(掛川古城周辺では対今川との両軍の総力戦が展開、一進一退の攻防)

②元亀元年(1570)姉川の戦い(織田・徳川連合軍と浅井・朝倉連合軍の間で行われた合戦)

天正4年(1576)、父・正親が死去するとその跡を継いで三河西尾城主となる。

33歳 ③天正10年(1582)、本能寺の変で織田信長が死去した時。家康一行は伊賀越えを行った際、白子(伊勢)で家康一行を船で出迎え、その安全を確保し家康を救う。

天正18年(1590)に家康が秀吉から関東に移封されると、武蔵川越に1万石の所領、城主となる。

42歳 ④天正19年(1591)7月16日川越の連雀商人たちに「新宿」を取立て、諸役の負担を免除させる証文をだす

11月 家康家康は関東の有力寺社に一斉に領地朱印状を発給。

浄土宗蓮馨寺(北条時代の川越城代大道寺氏所縁の寺)に20石の朱印状が交付。

曹洞宗蓮光寺(南東約半里に北条氏配下の富永善左衛門の館在り)に7石の朱印状交付。

43歳 ⑤文禄元年(1592)からの文禄の役では江戸城の留守居役を務める。

52歳 ⑥慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは本戦に参加。東軍勝利後、近江国大津城の守備を担う。

53歳 ⑦慶長6年(1601)3月3日、家康からその戦功を賞され、上野厩橋に3万3000石の所領を与えられ、川越から転封。

66歳 ⑧慶長19年(1614)からの大坂の陣では江戸城の留守居、兵糧輸送の責任者などを務める。

重忠の弟忠利、

川越藩主在職 慶長14年(1609)9月～寛永4年(1627)

慶長19年(1614)からの大坂の陣では、重忠は江戸城の留守居、兵糧輸送の責任者、忠利は、兄を助け江戸城の守備を務めた。



「川越の伝説」(発行：川越市教育委員会) 絵：池原昭治氏

伝説重忠「城中蹄の音」は忠利の時生まれたか?

元和元年(1615)9月、野田新田方面の新田開発に伴う諸役免除の特権を認める証文を有力農民田島隼人に出している。

幕府・将軍等の主たる動き

慶長10年(1605)11月17日に出獵、12月26日忍・川越より江戸城に帰る。

慶長12年(1607)11月朔日、大御所浦和、川越、忍の辺に放鷹

慶長16年(1611)10月29日、日々鷹狩、今日は川越に出向く。同年11月朔日、御狩場(川越に)天海を仙波喜多院に参り拝謁、寺領を給う。

同年11月13日、川越に出向く。秀忠、鴻巣より川越に。本多正純、安藤直次、松平正綱(信綱の義父)(以下略)、金並び馬を賜う。

慶長17年(1612)10月24日、秀忠川越に鷹狩、25日江戸城に戻る。

同年10月24日、大御所鴻巣から川越に狩に入り、25日、江戸城に戻る。

同年11月20日、秀忠川越の鷹狩、25日江戸城に帰る

慶長18年(1613)10月20日、大御所戸田から浦和を経て23日川越に放鷹。26日川越の御旅館に参る。

29日、仙波喜多院にて天海論議を催す。

中院の僧もこれを務める。30日忍へ。(時、天海83歳)

慶長19年(1614)11月、大坂冬の陣(方広寺鐘銘事件)

元和元年(1615)5月、大坂夏の陣

「消えた、深谷藩(城)」と徳川家康、秀忠、家光そして酒井忠勝

天正18年(1590)小田原征伐後、深谷に譜代の家臣松平康直(長沢松平家)を封じ1万石を与えた。

文禄2年(1593)康直24歳で没したため、**家康の子(7男)2歳の松千代**が深谷藩長沢松平家を継ぐ。
慶長4年(1599)松千代5歳で没したため、**家康の子(6男)7歳の兄忠輝**が深谷藩長沢松平家を継ぐ。
慶長7年(1602)、10歳の忠輝下総国佐倉藩4万石へ加増移封となったため、深谷藩は廃藩 **将軍家康**

慶長15年(1610)7月~元和8年(1622)10月の12年間ほどは**桜井松平忠重**が8000石で同地を治める。
1万石未満の旗本のため大名(藩)とはされない。

元和8年(1622)、**酒井忠勝(35歳)**が1万石で深谷に入り、**深谷藩再び立藩**。

翌年には、**家光が将軍**に就いた時。

将軍秀忠

忠勝は、小農民を保護し、藩政の確立に努めたという。

寛永元年(1624)8月には3代将軍家光の上洛に従い、11月に土井利勝と共に家光付の本丸年寄(老中)となる。忠勝37歳

寛永4年(1627) 忠勝の父川越藩主酒井忠利が死去したため、忠勝その跡を継ぎ川越藩主に。

寛永11年(1634) それにより、深谷藩は廃藩となり、深谷城も破却。

将軍家光

以後、**天領**として幕府直轄領となり、再々立藩も築城されることもなく明治維新を迎える。

・家光は「いにしへより、あまたの将軍ありといへども、我ほど果報の者はあるまじ。

右の手は讃岐(酒井忠勝)、

左の手は伊豆(松平信綱)、『空印言行録』

と評し、忠勝と信綱が幕府の確立に大きく寄与したことを評価している。また、「伊豆守ごとき者を今一人持ったならば心配は無いのだが」と小姓の三好政盛に語ったという。



酒井忠勝像(酒井家蔵)

天正15年(1587)6月16日
~寛文2年(1662)7月12日



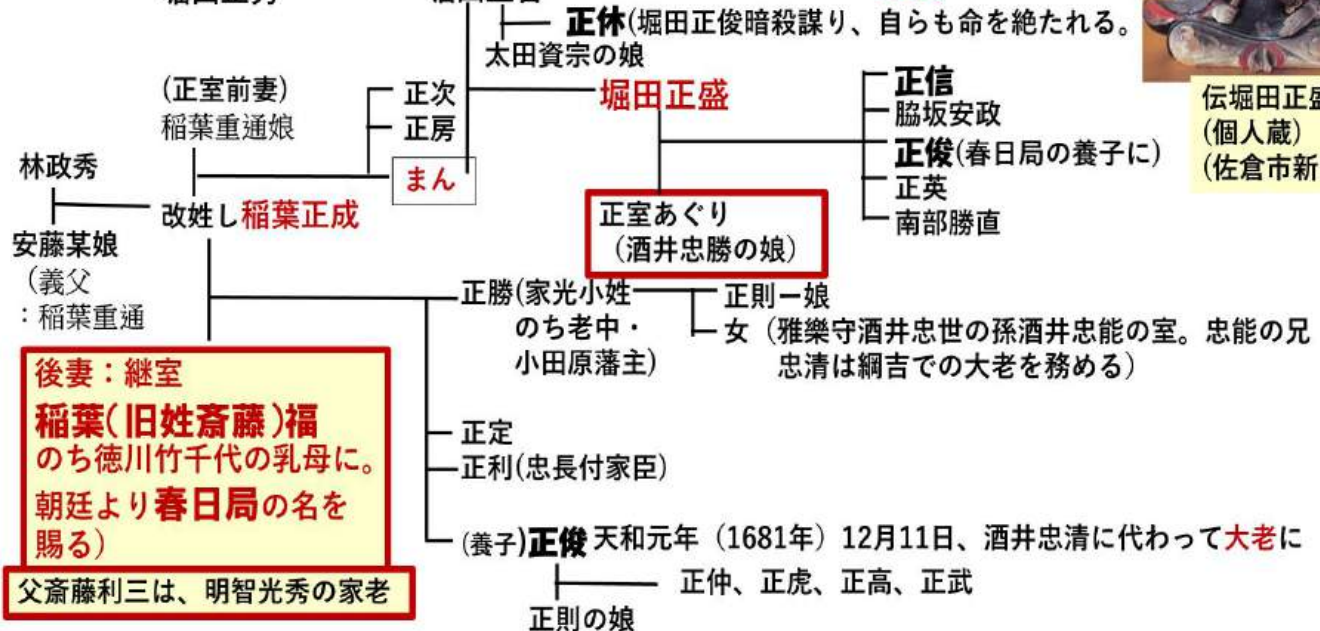
松平信綱(平林寺像)

慶長元年(1596)12月19日
~寛文2年(1662)5月4日

酒井雅楽頭忠世	上野厩橋	寛永13年(1636)年3月12日～寛永13年(1636)3月19日	7日	將軍家光
土井大炊頭利勝	下総古河	寛永15年(1638)11月7日～正保元年(1644)7月10日	6年	家光
酒井讃岐守忠勝	若狭小浜	寛永15年(1638)年11月7日～明暦3年(1657)5月26日	19年	家光・家綱
酒井雅楽頭忠清	上野厩橋	寛文6年(1666)年3月26日～延宝8年(1680)12月9日	14年	家綱
堀田筑前守正俊	下総古河	天和元年(1681)12月12日～貞享元年(1684)8月28日	3年	綱吉
井伊掃部頭直興	近江彦根	元禄10年(1697)6月13日～元禄13年(1700)3月2日	3年	綱吉
柳沢美濃守吉保	甲斐甲府	宝永3年(1706)1月11日～宝永6年(1709)6月3日	3年	綱吉(1月10日没)
井伊掃部頭直該(直興改め)	近江彦根	正徳元年(1711)2月13日～正徳4年(1714)2月13日	3年	家宣・家継
井伊掃部頭直幸	近江彦根	天明4年(1784)11月28日～天明7年(1787)9月11日	3年	家治・家斉
井伊掃部頭直亮	近江彦根	天保6年(1835)12月23日～天保12年(1841)5月13日	6年	家斉・家慶
井伊掃部頭直弼	近江彦根	安政5年(1858)4月23日～万延元年(1860)3月31日	2年	家定・家茂
酒井雅楽頭忠績	播磨姫路	慶応元年(1865)2月1日～同年11月12日	9ヶ月	家茂

堀田正盛は、 なぜ、異例の出世を成し得たのか

正秀は織田家臣、正吉も織田信長に仕官
堀田正秀 ——— 堀田正吉



伝堀田正盛坐像
(個人蔵)
(佐倉市新町)

堀田正盛は、

なぜ、異例の出世を成し得たのか。

父、堀田正吉、継祖母稲葉福（後の春日局）との関係から考えて

堀田正吉（元龜二年〔一五七二〕寛永六年〔一六二九〕

稲葉福（天正七年〔一五七九〕寛永二十年〔一六四三〕

正吉の父正秀は織田家臣、正吉も織田信長に仕官

本能寺の変では、豊臣秀吉に臣従

文禄元年（一五九二）稲葉正成、小早川隆景と

その子秀秋に仕える。

文禄五年（一五九六）福、稲葉正成に嫁す（十七歳）

慶長（一五九八）正成と福の子・正勝誕生

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦い

慶長七年（一六〇二）に秀秋没（二十歳）後、

小早川家を離れる。

小早川家は嫡嗣子無いためお家断絶。

慶長九年（一六〇四）竹千代（家光）誕生

稲葉福 竹千代の乳母に正式に任命される。

（その前年、福の三男正利誕生）

その選考にあたり、乳母になる要件のほか、

夫・正成の戦功が評価されたといわれている。

息子の稲葉正勝も家光の小姓に取り立てられる。

慶長十年（一六〇五）幕府に出仕し五百石を給される。

慶長十三年（一六〇八）正吉嫡男として正盛生まれる。

母は、小早川秀秋の家老であった稲葉正成の

先妻との間の娘、後妻（継祖母）稲葉ふく

（旧姓斉藤・父斎藤利三は明智光秀の家宰）

元和元年（一六一五）大坂夏の陣の後、八百石、

寛永元年 福島正則が没するとその検視役となる。

寛永二年（一六二五）千石

寛永六年 没する 五十九歳

（身分が低いことが正盛の出世の妨げになるのではと考え自害したとも言う。）

川越藩主となった堀田正盛

父堀田正吉の長男。

母は稲葉正成と先妻の娘

後妻稲葉福（春日局）の義孫

正盛：慶長十三（一六〇八）正吉嫡男として正盛誕生

12 歳 元和六年（一六二〇）十二月十に歳で家光（十六歳）

に初の謁見し近習となる。

15 歳 元和九年（一六二三）相模国にて七百石を賜り、

十二月晦日出羽守に叙任

17 歳 寛永二年（一六二五）相模国、常陸国にて五千石

を知行。

同年六月將軍家光上洛に供奉。小姓組三十騎の番頭。

この年に五千石の地の加恩あり、一万石となる。

加えて、上野国内にも新恩五千石を与えられ、

譜代大名として諸侯に列する。

25 歳 寛永十年（一六三三）三月二十三日に松平信綱ら

と共に六人衆（後の若年寄）となる。

その後相模・常陸・甲斐に各々五千石を得て、

二万五千石で城主格となる。

26 歳 寛永十一年（一六三四）七月家光上洛に供奉し、

十四位下に叙され、七月二十四日加賀守に改名

家光に深く寵愛された堀田正盛

27 歳 寛永十二年（一六三五）三月一日に老中に就任。

同時に、三万五千石をもって川越藩主となり、

初めて城持ち大名となる。

川越藩主在位

寛永十二年（一六三五）三月一日

寛永十五年（一六三八）三月八日

「仙波東照社」再建時の棟札

奉造主 仙波星野山東照大権現御社一字所

御奉行 堀田加賀守從四位下藤原正盛

御奉行 堀田加賀守從四位下藤原正盛

御願主 征夷大將軍 源家光公

御願主 征夷大將軍 源家光公

御導師 山門三院執行探題法印大僧正天海

御導師 山門三院執行探題法印大僧正天海

(裏面) 「寛永十七庚辰年林鐘十七日」

寛永十七年…一六四〇年

とある。

林鐘…六月の異称

松平信綱による幕藩体制のによる産業経済等の政策

川越城主松平伊豆守信綱の藩政

- ① 十ヶ町四門前の整備
- ② 川越城城郭の拡張
- ③ 砂久保を初めとする福原地区の開発
- ④ 新河岸川舟運の開設
- ⑤ 川越祭りの奨励

慶安元年(1648)

氷川社に神輿二基・獅子頭二頭他祭礼具寄進

慶安 4年(1651)9月25日

初の神幸祭が執り行われる。(現在に至る)この年、家光逝去、

由井正雪の乱、
家綱11歳で
4代将軍に

川越城主(平林寺蔵)

松平伊豆守信綱

氷川社
神幸祭巡行



- ⑥ その他

文政9年(1826)「川越氷川祭礼絵巻」
伝江野煤雪画(氷川神社蔵)

玉川上水と野火止上水

承応2年(1653)に開設された用水路**玉川上水**。

松平伊豆守信綱の指示のもと玉川兄弟のさまざまな苦勞によってつくられた。
その水は今も、東京都民のために使われている。

およそ8ヶ月で完成させた玉川上水

全長およそ43kmの工事は予想外の難工事だった。 **立川市内を流れる玉川上水**

水を流すしゃ面を作るためには100mごとに、約21cm低くしていく必要があった。見た目には、ほとんど低さがわからない工事を繰り返し行った。
工事には水盛台（みずもりだい）という、溝に水を入れ水平になっているか、傾いているかを知る道具などが使われた。

承応4年(1655)に玉川上水から分水し、開設した**野火止用水**。
立川市の玉川上水（小平監視所）から新座市を通り新河岸川（志木市）に続く用水路。

家臣の安松金右衛門と小島助左衛門に補佐を命じ、約24kmの水路造りを40日の工期で掘り切ったとされる。

主に飲料水や生活用水として利用され、後に田用水としても利用された。別名を伊豆殿堀（いずどのぼり）という。

かつてはいろは樋を渡って、旧宗岡村にも水を送っており、いろは通りの歩道側には暗渠が現在も残っている。



平林寺南側を流れる野火止用水



玉川兄弟
東京都羽村市



堀田正俊 寛永11年(1634)11月12日
～貞享元年(1684)8月28日

柳澤吉保 万治元年(1659)12月18日
～正徳4年(1714)11月2日

忠勝、信綱亡き後の幕政と川越藩主

川越藩主松平輝綱、信輝から柳澤吉保の世

徳川綱吉の治世は延宝・天和・貞享・元禄・宝永。1680年から1709年までの**29年間**にわたります。

そのうち前半の天和・貞享期は**老中堀田正俊**が政治力を振るう。

後半の元禄・宝永期は**側用人の柳澤吉保**が政治力をふるいました。

堀田正俊と天和の治

父は、堀田正盛

堀田正俊は、綱吉の將軍就任当初から信任を受け、**堀田正俊は「民は国の本なり」**を

モットーに、**貧民救済**を行う一方、**年貢の取りこぼしを許さず、不正代官を取り締まった。**

大名でも不正があると容赦なく取り潰した。その苛烈さは諸国の大名に恐れられました。

堀田正俊の政治は後世「**天和の治**」と呼ばれています。

御側御用人の台頭

老中堀田正俊の暗殺事件の後、将軍と老中・若年寄の間に距離が置かれた。
それまでは将軍の居室のすぐ近くの御用部屋に老中・若年寄が詰めていた。

老中・若年寄と将軍との間に伝達役を置く必要が出てきた。その伝達役が「**御側御用人**」とか「**側用人**」と呼ばれる幕臣である。時、元禄元年(1688)6月10日、**柳沢吉保**は、西の丸下から一橋内の屋敷に移り、同年11月12日、小納戸上席より**将軍親政のために新設された側用人に就任**する。暗殺事件の後、この側御用人の立場が急激に強くなっていくことになる。

老中・若年寄は将軍の部屋から遠く離れた部屋で待機させられることに

高麗縁の上畳に坐す束帯姿の吉保。
金時絵の文机に「古今和歌集」が置かれている。



狩野常信筆
柳沢吉保肖像画(元禄十五年〔一七〇二〕)
甲府市一連寺蔵